

この度、「未来へのメッセージ舎」の島内氏、並びに津田氏のご厚意により、1990年北九州市が主催した「自分史文学賞」で佳作となり、翌年、出版された私の父の作品「立坑独立愚連隊」が電子図書として再び、世に出ることになりました。お二人、並びに関係者の皆様に御礼、感謝を申し上げます。

私の父は55歳になった年、胃癌を患い、技術者として勤めていた建設会社を早期退職。以降、療養しながら何やら机に向かってコツコツと書いておりました。当時、父が何を書いているのかなどと私は気にもせず、脚本家として仕事に忙殺されておりましたが、ある日、珍しく、父から電話。

「自分史文学賞をとった。出版もされる」

驚きでした。と同時に、生涯、技術者として過ごしてきた父ですが、本を書きたいと密かに願っていたことを家族は知っていましたかたら大喜びです。「お父さん、やったね」

父は昭和二年福島県いわき市生まれ。幼少期を戦時下で過ごし、昭和19年、17歳で陸軍士官学校に入学、翌年陸軍の航空士官学校に進み、特攻隊帳として出陣する為に訓練に明け暮れていた昭和20年夏に敗戦を迎えました。

以降、大学を卒業後、いわき市にある常磐炭砒に入社。その頃、国のエネルギー政策の中心は石炭でした。昭和27年生まれ私ですが、炭砒がまだまだ景気のよかった時代で、会社あげての祭やら、華々しい運動会があったことを覚えています。この本のタイトルにもなった「立坑」は、鉱山技術の中でも特殊な分野です。通気と運搬の為に坑道に向かつて地面からまっすぐ、600メートルを超える深さまで掘り進めていく、一歩、間違えれば、死に直面する危険な仕事でした。父はその技術責任者として、不良砒員やら何やら、一筋縄ではいかない部下達を率い、上司、そして又、当時、全盛だった労働組合の理不尽さと闘いながら、機械ではなく、人の力で掘るといふ、手掘り技術の世界記録を作りました。その過程を描いたのがこの本のメインです。25年たった今、改めて読んでも、その人間模様には何かジンとくるものがあります。

父が話してくれた事で私には決して忘れられない話があります。航空士官学校での授業の話です。20代半ばの教官が戦闘機の飛距離の話をし、18歳の父にこの燃料で沖縄まで飛んだらどうなるかと聞いたそうです。

「帰ることができません」

父の答えに若い教官は「そうなんだ」と答え、沈黙したと。家族の為、故郷の為、日本の為、それでも飛ぶのだ、と、二人の思いは一緒だったでしょう。若い教官は、その後、

沖繩に飛び立ち、特攻をする前に敗戦を迎えた父は、焼け野原になった日本の再建の為に必死で働きます。現在の日本を作ったのは、英霊になられた方々、戦地に赴きながら生き残ったという、英霊にたいするある種の罪悪感を心に秘め、文句も言わず、日本の再建の為に懸命に働いた方々です。

十年前に父は亡くなりましたが、思うに、父の独立愚連隊は、敗戦の無念を噛みしめた父が、その愛する部下達と共に闘った、もう一つの誇りある戦争だったのでないでしょうか。